



# 俳句の味わい

堀本 裕樹  
ほりもと ゆうき

## 目標

- 俳句の中の言葉の使われ方に注意し、語感を磨き語彙を豊かにする。
- 俳句の情景やその描かれ方について評価しながら読む。

渡り鳥みるみるわれの小さくなり

上田 五千石  
うえだ ごせんごく

秋の季語である「渡り鳥」は、北方から日本に渡ってきますが、この句を読んだとき、不思議な表現になっている部分に気づくでしょう。

ふつう飛び去る渡り鳥を見上げていると、小さくなっていくのは渡り鳥のほうですが、この句では「みるみるわれの小さくなり」と見ている自分が小さくなっていきますね。とても不思議な感じがします。しかし作者はわざとそのように表現しているのです。

俳句は短い文芸ですから、どこかに工夫を凝らす必要があります。目だたないような細かな工夫もあれば、この句のように大胆な工夫を凝らすこともあります。

## 俳句のぎまり

俳句とは、五・七・五という三句十七音からなる、世界で最も短い短詩型文学。一句、二句と数える。

一句の中で、言葉のつながりの切れめや、意味の切れめにあたるところを句切れという。

また、句の表現をいったんそこで切って、余情や感動を表すはたらきのあるいくつかの言葉を切れ字という。したがって、切れ字の現れたところは必ず句切れになる。

上五（最初の五音）で「渡り鳥」とつぶやいた瞬間に、作者の心が渡り鳥に乗り移っているように思えます。つまり渡り鳥の目から「われ」を見ている情景に切り替わったといえるでしょう。このように視点を逆転させたことで、この句を読む人は渡り鳥の目になって、空から自分を見下ろしているような、飛んでいる気分まで味わえるのです。

おおかみに螢が一つ付いていた

金子 兜太

この句は狼を詠んでいます。明治時代に日本狼は絶滅したといわれています。

実際に作者は狼を見て句を作ったわけではなく、その姿を思い浮かべたのです。作者の故郷は埼玉県の秩父という山深いところ。そこには狼が生きていた時代がありました。

作者が山国の故郷に思いを馳せたとき、狼の姿がふっと胸の中に現れたのでしよう。

一匹の狼に螢が一つしがみついた場面は、どこかユーモラスでいて幻想的な光景でもありません。狼という大きな強い動物と、螢という小さな儂い虫とが触れ合っている不思議な出合いの場面ともいえますね。

「狼」が冬の季語で、「螢」が夏の季語なので、季語が二つある季重なりの句ですが、この句の季節は螢の舞う夏でしょう。

狼と螢の二つのいのちが静かに息づいている、土の濃い匂いのする一句です。

例 や／ぞ／かな／けり  
ぬ／ず など

俳句には、季節を表す言葉である季語をよみこむ、というきまりごとがある。季語は、一句一つが原則。季語を季節によつて分類整理した書物を「歳時記」という。

五・七・五という型や、季語を入れるなどの俳句のきまりにとらわれない句を自由律俳句という。種田山頭火、尾崎放哉などがその代表的俳人。

ずぶぬれて犬ころ

すみたく けんしん  
住宅 顕信

この句はたった九音しかない自由律俳句で、雨に濡れそぼった子犬をぽんと放り投げるように言葉にただけです。しかし、誰しもこんな子犬をどこかで見たことがあるでしょう。たとえば学校の運動場や公園の砂場などで、親犬も飼い主も見あたらない犬ころが雨に打たれて佇んでいるのです。なぜ作者は、こんな淋しい子犬を一句にしようと思ったのでしょうか。

作者は地元の中学校を卒業後、調理師専門学校を経て、飲食店に勤めます。その後市役所で働きながら、僧侶としても活動していました。結婚するも、急性骨髄性白血病を発病。長男が生まれますが、離婚。作者はその子を引き取り、作者の母親の手を借りながら、病室で育児も行いました。

このように作者の人生を数行で書いていただけでも、めまぐるしく壮絶であったことが想像できますね。雨に打たれてずぶ濡れになった子犬の孤独な姿に、作者はやりきれない自分自身の境遇を重ねて見ていたのかもしれませんが。

生涯に二百八十一句を残した作者は、満二十五歳十か月で亡くなりました。

「春風の重い扉だ」「かあちゃん言えて母のない子よ」「若きとはこんな淋しい春なのか」など、短い人生を切実に見つめた句が、読む人の胸に迫ってきます。

かえん  
火焰土器よりつぎつぎと揚羽かな

堀本 裕樹

15

10

5

(168ページ)  
上田五千石

一九三三—一九九七

東京都に生まれた。句集に『田園』『風景』などがある。

(169ページ)  
金子兜太

一九一九—二〇一八

埼玉県に生まれた。句集に『金子兜太句集』『東国抄』などがある。

住宅顕信

一九六一—一九八七

岡山県に生まれた。句集に『未完成』などがある。



### 堀本 裕樹 「一九七四」

和歌山県に生まれた。俳人。

句集に

『熊野曼陀羅』『一粟』、著書に『俳句の  
図書室』『桜木杏、俳句はじめてみました』、又

吉直樹との共著『芸人と俳人』などがある。

《出典》本書のために書きおろしたものである。



縄文時代中期に作られた火焰土器は、まるで器そのものが炎を噴き上げるような情熱的な形をしています。土器に施された装飾も火炎のように美しく、その躍動的なうねりを見ていると、何か見えないものを噴き出しているエネルギーを私は強く感じました。

いったいこの火焰土器の放っているエネルギーとは何なのだろうと思っっているうちに、私の頭のなかに不意にたくさんの揚羽蝶の姿が浮かび上がりました。そして火焰土器の大きく開いた口から、つぎつぎに舞い上がる揚羽蝶のイメージに結びついたのです。この光景は理屈では説明しきれない、突然浮かんだ幻想的なもので自分でもはっとしました。

「揚羽」とは揚羽蝶のことであり、夏の季語になります。「蝶」といえば春ですが、「夏の蝶」「秋の蝶」「冬の蝶」と四季を通して季語になっています。

この句を文節で区切ると、「火焰土器より」で七音、「つぎつぎと」で五音、「揚羽かな」で五音の合計十七音になります。五・七・五の正調のリズムではないこの句は「破調」もしくは「句またがり」といいます。破調にすることで揚羽蝶の飛ぶ勢いが増しました。



国宝 火焰型土器

# 俳句十五句

## 春の句

春風や鬪志いだきて丘に立つ  
 卒業の兄と来てゐる堤かな  
 ものの種にぎればいのちひしめける

## 夏の句

夏草やベースボールの人遠し  
 万緑の中や吾子の齒生え初むる  
 かぶとむし地球を損なわずに歩く

## 秋の句

星空へ店より林檎あふれをり  
 秋草にまろべば空も海に似る  
 よし分った君はつくつく法師である

高浜 虚子  
 芝不器男  
 日野草城

正岡 子規  
 中村 草田男  
 宇多 喜代子

橋本 多佳子  
 木下 夕爾  
 池田 澄子

高浜虚子 一八七四—一九五九

愛媛県に生まれた。句集に『五百句』『六百句』などがある。

芝不器男 一九〇三—一九三〇

愛媛県に生まれた。句集に『不器男句集』などがある。

日野草城 一九〇一—一九五六

東京都に生まれた。句集に『花氷』『人生の午後』などがある。

正岡子規 一八六七—一九〇二

愛媛県に生まれた。句集に『寒山落木』、歌集に『竹乃里歌』などがある。

中村草田男 一九〇二—一九八三

中国の廈門領事館で生まれ、愛媛県で育った。句集に『長子』『萬緑』などがある。

宇多喜代子 一九三五—

山口県に生まれた。句集に『象』『記憶』などがある。

橋本多佳子 一八九九—一九六三

東京都に生まれた。句集に『海燕』『紅絲』などがある。

木下夕爾 一九一四—一九六五

広島県に生まれた。句集に『遠雷』などがある。

冬の句

冬菊のまとふはおのがひかりのみ  
木の葉ふりやまずいそぐないそぐなよ  
息白くやさしきことを言ひにけり



分け入つても分け入つても青い山  
咳せきをしても一人  
戦争が廊下の奥に立つてゐた

千  
みちしるべ

1 P 168〜171を参考にして、「俳句十五句」の中から印象に残った句を選び、批評しよう。

2 次ページのコラムを参考にして、クラスやグループで句会を楽しもう。

水原 秋櫻子  
加藤 楸邨  
後藤 夜半

種田 山頭火  
尾崎 放哉  
渡辺 白泉

池田澄子 一九三六

神奈川県に生まれた。句集に『空の庭』『拝復』などがある。

水原秋櫻子 一八九二―一九八一  
東京都に生まれた。句集に『葛飾』『霜林』などがある。

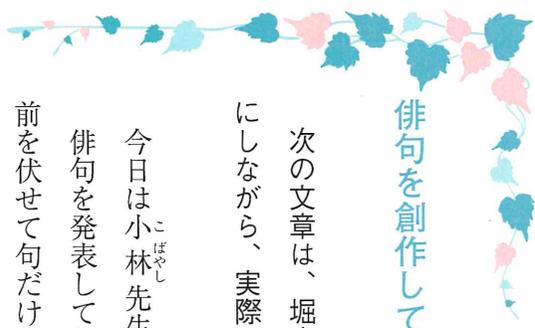
加藤楸邨 一九〇五―一九九三  
東京都に生まれた。句集に『寒雷』『野哭』などがある。

後藤夜半 一八九五―一九七六  
大阪府に生まれた。句集に『翠黛』『底紅』などがある。

種田山頭火 一八八二―一九四〇  
山口県に生まれた。句集に『草木塔』がある。

尾崎放哉 一八八五―一九二六  
鳥取県に生まれた。句集に『大空』がある。

渡辺白泉 一九一三―一九六九  
東京都に生まれた。句集に『白泉句集』などがある。



## 俳句を創作して、句会を楽しもう

次の文章は、堀本裕樹さん作の紙上句会です。文章を参考にしながら、実際に俳句を作って句会を体験してみましょう。

今日は小林先生が司会進行役で句会をしている。

俳句を発表してお互いに評価し合う句会は、まず短冊に名前を伏せて句だけを書いて提出する「出句」から始まる。次に「清記」といって参加者の句を集めてプリントなどで一覧にして、そこからよいと思った句をいくつか選ぶ「選句」をする。このとき自分の句は選ばない。それから各自が選んだ句を読み上げて発表する「披講」を行う。このとき「点盛り」といって点数を集計していく。

いよいよ最後の「選評」だ。作品についてそれぞれ感想を述べて批評していく。僕は少し緊張していた。

「さて、特選を二点、佳作を一点として集計した結果、一番点数が高かったのが〈向日葵を手向け何から話そうか〉という句でした。この句を特選に選んだのは、岡田君。どこに魅

力を感じて特選にしましたか？」

えっ！ いきなり僕からか！ どうしよう……。

「はい、えっと。そのう……向日葵をお墓に手向ける風景が浮かんできて共感しました。」

「そうだね。もっと具体的にイメージしてみようか。」

「たぶん亡くなった誰かだと思うのですが、僕は作者のお母さんが亡くなったのかなと思いました。」

「なるほど。小谷さんも特選ですが、どうですか？」

「はい。私は友達が亡くなったのかと思いました。向日葵が好きな友達だったので、お墓に行ってお供えしたんだけど、話したいことがいろいろあって、〈何から話そうか〉という表現になったんだと思います。友達が亡くなくても友情は続いているんだなって感じました。」

小谷さんの選評すごいなあ。僕よりずっと深く作品を読み込んでいて。僕の選評、まちがっていたらどうしよう。

「では、北野君も特選ですね。どうですか？」

「僕は作者のおばあちゃんが亡くなったのかなと思いました。向日葵の好きなおばあちゃんって、生きていたときは作者といろんなおしゃべりをしたのかなと。だから、おばあちゃんが

亡くなくてもお墓に行くとか、ついついいろんな話をしてしま  
うんじゃないかなと思いました。天国の亡くなったおばあ  
ちゃんも、作者の話す声を優しい笑顔で聞いてくれているよ  
うに感じました。」

北野君もすごい想像力。亡くなったのはおばあちゃんに思  
えてきた。

「はい、ありがとうございます。では、この句の作者は誰ですか？」

「永井里香です。」

ここで「名乗り」といって作者が明かされ、教室がざわめく。

「永井さん、この句はどんな気持ちで詠んだのですか？」

「はい。向日葵を手向けたのは半年前に亡くなった従姉妹の

清子さんです。大学生だった清子さんには何度かお笑いのラ

イブに連れて行ってもらったのですが、いつも優しく笑顔

でした。向日葵みたいに背が高く明る人だったので、お

墓参りには向日葵をお供えするんです。清子さんは急病で亡

くなりましたが、お墓の前に行くと、悲しい気持ちよりも話

したいことがあります。困るくらいです。それで〈何から話

そうか〉と表現しました。」

「永井さん、ありがとうございます。今、本人から句にこめた思いを聞

きました。三人の評とは違ったけれどもそれでいいのです。

読み手は自由に解釈して構いません。だから三人ともまちが  
いではないのです。むしろ句会では作者の詠んだ意図と、読  
み手の解釈のズレがあつてあたりまえで、それを楽しむもの  
なのです。この句は夏の季語である向日葵を誰に手向けたの  
かは省略されていますから、読み手によってどんな人物を思  
い浮かべるかはそれぞれですね。この省略された部分を想像  
して補って読むのが、俳句の醍醐味でありおもしろさなので  
す。句会のもう一つのおもしろさは、作者を知らずに作品だ  
けて句を選ぶところです。作品の魅力だけで選ぶのは公平で  
すし、誰が作者なのかわかるまでドキドキしますね。永井  
さんの句はとても思いの深い句でした。」

小林先生から選評にまちがいはないと聞いて、僕は安心し  
た。そして改めて永井さんの句が胸に響いてきた。

永井さんは、向日葵みたいな清子さんのお墓の前で、いつ  
たいどんなことから話し始めたのだろう。

(俳句は、加留かるか作)

